

ホトトギス

昭和二十四年二月二十八日運輸省特別授承認雑誌第百二十七号  
平成二十九年十一月二日発行（第百二十号第十号）

# ホトトギス

十月号



## 俳句随想〔四百二十四〕

汀子

今年には正岡子規生誕百五十年ということによって様々なイベントが行われている。その一つに「山会」を取り上げて、横浜の神奈川近代文学館に於てデモンストレーションの一つとして開催された。「俳句」八月号でその全貌が掲載されているが、「ホトトギス」では九月号にそれらの文章が掲載された。「山会」は正岡子規の病床で、写生文を読み上げて、入選した写生文を「ホトトギス」に掲載することになる。子規没後、虚子の許で、年尾の許で、山口青邨の許で、いまは稲畑汀子の許で続けられているという長い歴史がある。

私の後は「ホトトギス」主宰の稲畑廣太郎がその任を果してくれる。継続は力であると人は言う。誠にその通りで、今後の「ホトトギス」を読者の皆様に支えて頂きたい。

色々な形で俳句が続けられている。今は結社に属さないで仲良しグループで作るといふどうでもよい俳句の楽しみ方があると聞いた。テレビで人気の先生の語り口が面白いので、それも俳句の集まりに繋がって行く。

人気の先生は、どんな作品を世に示しているのか、見たことはない。人の作品群を動かして、作者の魂を脱しでは、その作品は添削した人ものになる。十七文字という短い詩を人手に渡してはならないと私は思っているが、勉強の過程では許される。私が虚子に俳句を書いて見て貰ったとき、〇が付くだけであり、その〇印が付いたのは何故か、自分で考えて心に納めた。そして、季題の勉強を大事にして来たのである。

旬日記 汀子

平成二十八年十月一日 芦屋ホトギス会

陰深し露けき朝の明け初むる

十月二日 下萌句会

繁忙も日常のものそぞろ寒  
崩れんとして秋の空立直る

十月三日 ロイヤル吟行会

午後雨の予報露けき外出かな  
人数に似合ふ明るさ秋灯  
台風の聞き捨てならぬ行方あり  
二三人來れば明るき秋灯  
初ものや松茸を先づつまむ箸

十月十一日 大阪倶楽部

禁酒してなほ氣にかかる新酒かな  
真夜覚めて秋の夜空の星仰ぐ  
渡り鳥遅るる一羽見送りぬ  
生きてゆくために身に入むことをいざ  
言ひ分けは口には出さず秋高し  
身に入みて日歸りの旅組み込まれ

十月十一日 綿業倶楽部

朝寒は心地よき日のはじまりし  
一瞬の一枚となる椋鳥の空  
東京の朝寒発ちて來しことを  
椋鳥の來てぬし庭と氣づくまで  
日歸りの旅の朝寒なりしこと  
十月十二日 工業倶楽部  
忽ちに新酒の話題ありにけり  
秋晴を纏ふ一と日の旅となる

十月十三日 清交社

作品の中に秋晴ありにけり  
素人と思へぬ展示秋の晴  
歳月の語つてをりて爽やかに  
一服のお茶にくつろぐ秋の晴  
一と句会終へて今宵の十三夜  
明日へと続く秋晴待つことも  
新米に長き縁のありにけり  
十月十四日 西の虚子忌

集ふことすなはち西の虚子忌かな  
山路來し一人ひとりの秋日和  
秋冷の山懐に忌を修す  
十月十八日 有恒俳句会

冷まじや思ひ出しては又忘れ  
人生を終へる日は何時冷まじや  
十月十八日 無名会

待つてぬしこの日やうやく朝寒し  
朝寒の午後は雨傘持てといふ  
我が家にも椋鳥の群れ來し昔あり  
忘れゆくものの一つに朝寒も  
朝寒の連れて來たりし快晴に  
朝寒に氣力ととのへ行きにけり  
朝寒を纏ひ一文草しけり  
十月十九日 夏潮句会

脱稿のやうやくにして菊月に  
長月の冷房入るる人数に  
初鴨の消息も聞き忌を修す  
初鴨の來し消息の中にをり  
咲きさうに咲きさうになく女王花  
落花生には手の届く席のあり

とり合へず落花生より供されし  
十月二十日 クラブ合同

這ふものも飛ぶものもぬて花野かな  
十月二十一日 アネモネ句会

秋風を抜け秋風をまとひけり  
身に入みて聞く地震のこと今昔  
脱稿や身に入む心開放す  
身に入むや地震の報道聞きながら  
誰彼の話身に入むことばかり  
十月二十二日 句会と講演の会

もしかして鶺鴒かも知れぬ飛び立ちぬ  
句はねば庭木に紛れ金木犀  
行秋のなほ旅にあり旅を恋ふ  
木屋の句ふ家居を樂しまむ  
十月二十四日 摩耶山俳句大会

悲しみを癒す秋晴なりしか  
こんなにも晴れ爽やかに人集ふ  
十月二十六日 年尾忌

露踏みて忌日の旅のはじまれる  
雨男なりし年尾忌快晴に  
十月二十七日 きとらぎ会

いつもなら着けば添水の音の中  
止めてある添水に客の百余人  
菊月の昨日に続く今日の晴  
十月二十八日 時雨句会  
熟れ加減鳥が知らせて吊し柿  
宮様の御逝去悼み露しぐれ  
行秋の雨となりたる淋しさよ  
一つづつ予定消しゆく秋の暮  
行秋の雨に來られし人迎ふ

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年十月一日 芦屋ホトトギス会

みよし野の桜紅葉といふ静寂  
故郷の風に色増す赤い羽根  
林檎食む人は原罪背負ひつつ  
露けしや横川の忌日近づけて

十月二日 野分会芦屋例会

秋の声ワインに溶けてゆきにけり

十月二日 青嵐会芦屋例会

今年米 丼 飯 といふ 昔

啄木鳥に森の縮んでゆきにけり  
啄木鳥の音を吸ひ込む山の精

十月三日 カトリック新聞選者吟

運動会 車窓に嵌めて故郷へ

十月六日 蕉心会

大川の水裏返しゆく野分  
颯風が過ぎれば茹だる都心かな  
太陽を隠して欲しき秋の雲

水澄みて水尾を歪めてをりにけり

橋桁を揺すぶつてゐる野分かな  
小鳥来る口ケ隊も来る河川敷

秋日濃し刑事ドラマの一場面

鱚雲崩れ鯖へとなる早さ

十月十一日 友結婚祝

爽やかに未来培ふ華燭かな

十月十二日 日黒字園句会

立山の風の存問 落し水

聖櫃のランプ身に入む赤さかな  
蝦夷の風馬鈴薯剥けば立ち上る  
身に入みて横川鎌倉忌を修す

十月十三日 土筆会

夷講抜けて侍りし祝ぎの宴  
松手入本山といふ樹齢かな

松手入地震の記憶も新たななる

稲穂揺れ日の本大地揺さぶれり

松手入星のきざはしより咫蹴

十月十七日 「円虹」新年号色紙揮毫

宝船会ひたき君に会ひに行く

十月十八日 むさし野吟行会

初黄葉首都の公園てふ静寂  
江戸の世を遺す街並天高し

木の実落つ首都の喧噪吸ひ込みて

天高しスカイツリーを吊り上げて

秋蝶の黄に導かれゆく歩幅

十月十九日 北國文芸選者吟

身に入むや句碑の歲月刻む湖

十月二十日 登高会

叡山の忌日に供へ今年酒  
金風に磨かれてゆく五感かな

秋風に結社の未来問ひもして

石狩の風は饒舌実植瑰

十月二十日 「円虹」新年号近詠

筆始先づ言の葉を選ぶより  
一杯の珈琲仕事始かな

鏡板朝日に栄えて能始

駅どつと御用始の晴着かな

算盤の音懐かしき帳始  
十月二十一日 「俳句界」三十句

立て直す心新たに去年今年  
初鶏や生家の門を少し開け

胸中の憂ひ照らして初明り

初富士に都心は黙を解かざる

初凧に流れ止めたる芦屋川

若水に心の濁り流したき

六甲の稜線凛と初景色

信じれば恵方必ずありぬべし

復活の兆し年玉受けるより

年賀状見てより気付く齡かな

初電車十年振りといふ縁

門松やせめて心は前向きに

櫛やまだまだしがみついてをり

悲しみを乗り越えし人手毬つき

追羽子の音に昔を見てをりぬ

掌に独楽を廻して思ふこと

双六やあの頃はあの頃のこと

嫁が君にも愚痴を言ふ漢かな

掃初や心の芥もろともに

この場所は一寸贅沢事務始

買初といふ細やかな安堵感

弾初に指喜んでをりにけり

初夢に思ひ出したくなき事も

席題に一喜一憂初句会

何もかも忘るることも新年会

初荷受け活気戻りし事務所かな

初風呂に体沈めてより思案

正夢も逆夢も夢宝船  
初旅を終へて始まるこの生活  
前向きといふ言の葉も三ヶ日  
十月二十二日 ホトトギス社句会

曇天も木犀の香の押し上げて  
鴉鳴いて森の妖精目覚めゆく  
年尾忌や思はぬ人がカープファン  
木犀の香に導かれ行く茶席  
十月二十三日 青嵐会東京例会

秋惜むタワ一の先にある未来  
行秋の句座とは人を丸くする  
街騒を隔て都心の薄紅葉  
黄葉して都心の色となりゆけり  
十月二十三日 野分会東京例会

もういいかいまあだだよてふ秋の声  
猫の耳ぴくと動きて秋の声  
野良猫の去りゆく先の秋の声  
赤い羽根あの娘が出来てをり  
赤い羽根つけて防衛省に入る  
十月二十四日 朝日カルチャー若草句会

里山の膨らんで来し初紅葉  
小鳥来る都心の空を知り尽し  
小鳥来て何時も決まつて止まる枝  
吉野山人遠ざけて初紅葉  
小鳥来る住宅街の一過客  
十月二十五日 若水句会

神々の冬支度とは旅支度  
豊作の嵩に積まれし今年藁  
榎植落つ音に忌心育ちゆく

神宮の改装といふ冬支度  
神の杜色を変へつつ冬支度  
新藁の香に寄り添へる牛親子  
鎌倉の忌日榎植は知つてをり  
十月二十六日 年尾忌

五山より金風纏ふ忌日寺  
三十八回の露けき燭点る  
榎植の実忌心ほどの色に熟れ  
十月二十八日 徳源寺句会

成瀬家を偲びて城の秋惜む  
見上げれば城見下ろせば鴨来る  
城山を洗ひ上げたる秋時雨  
秋雨も茶室彩るものとして  
十月二十九日 岡山学友会

紅は風白は水面に解けて萩  
秋天に触るる高さの磴登る  
能面に露けき角度ありにけり  
吉備の風一樹の紅葉仕上げゆく  
木の実落つ磴に音階奏でつつ  
朝寒を物ともせず座禅組  
紅葉且散る良寛の字のやうに

# 雑詠 廣太郎 選

丸の内あたりも神田祭町 東京 今井千鶴子  
 弾き了へて大きな拍手薔薇を抱く 同  
 薔薇散つてしまひて何もかもおしまひ 同  
 せめて紅つけやり雛を流しけり 神戸 和田華凜  
 空の青すぎれば哀し流し雛 同  
 三楹の花にそれぞれ午後雨 同  
 紫陽花の白のかなたに子の未来 同 藤井啓子  
 神の森抜け風となる加茂競馬 同  
 分枝に草笛吹くといふ授業 同  
 青嵐天才棋士は十四歳 同 山西商平  
 雨不足ですがと梅雨入告げてをり 同  
 あれは鮎流れの綺羅に紛れしは 同  
 句碑の伽終へしと小鳥引きにけり 直方 林加寸美  
 旅心鮎解禁の古里へ 同  
 読み疲れみどりの風を遠く見る 同  
 囲みたる水の束縛花菖蒲 香川 湯川 雅  
 一水の出入口草茂る 同  
 蟻地獄つひに何ンにも起らざる 同

先立ちし妻恋ふ花の散りそめし 福山 竹下陶子  
 遠投のキャッチボールや風薫る 同  
 ホームランバッター三振風薫る 同  
 滝といふ詩魂が落ちてゆきにけり 熊本 岩岡中正  
 事もなき今年の春を惜みけり 同  
 うしろより惜春の風吹いてゐる 同  
 太陽と新緑と友待つ大地 長岡 安原 葉  
 着陸へ北の五月の待つ大地 同  
 そちこちと指差されても夏霞 同  
 雪空に飛驒の高山町暗く 神戸 後藤比奈夫  
 飛驒なれや矢来の如く軒氷柱 同  
 千本の氷柱を垂れてしづれ雪 同  
 虹鱒の紅を泳がせゐる水路 同 山田佳乃  
 犬山の茶碗拜見風炉手前 同  
 残像は光のしぶきつばめうを 同  
 濃き青に明るき白に卯浪立つ 同 立村霜衣  
 海荒く呼吸して卯浪となりぬ 同  
 綺羅はこぶ卯浪風早西ノ下に 同  
 渓谷の小さき空や山女釣 袋井 湖東紀子  
 咲き誇りたる一瞬に薔薇崩れ 同  
 太陽も雨もこれから初夏の庭 同  
 街角に白ふいに咲き夏近し 龍ヶ崎 今橋真理子  
 夏近し街をはみ出しさうに木々 同  
 花びらを風にあづけて薔薇百花 同

# 雑詠句評（九月号より）

とほ歩・葉・保佳  
肖子・敦子・憲明  
むつみ・静龍・中正  
眞理子・廣太郎

## はらはらと散りひらひらと蝶となり

神戸 涌羅 由美

蝶、春四月の季題。

一読、楽しく優美な句である。

はらはらは、花びらで、ひらひらは蝶とも解することも出来るし、はらはらも、ひらひらも蝶と解することも出来るが、私は、後者と解した。

いづれにしろ、花に誘われ、花にまとい舞う蝶には、春そのものの風情がある。

その蝶が優雅に舞う様を表現するのに、はらはら、ひらひらと云う措辞の幹施は、素晴らしい。吉野の桜の時期等にはよくこのような情景を見たりする事があるが、落花がはらはらと舞っている

ように見え、それが地に着く少し前に突然舞い上がる。これだけでは未だ風が花弁を舞い上げていると思うが、結局蝶となって飛び去って行く。擬態語が神秘的な響きを醸し出している。（廣太郎）

## 語らふも都をどりを見し手つき

神戸

立村霜衣

京都の祇園甲部歌舞練場（今年は工事中のために別会場になった）で毎年四月の一カ月間行われる都踊を見て来た帰路での、寛ぎの場の情景であろうか。うち解けて親しく語り合う場でも、都踊のあのしなやかな手つき、動作が自然に出てくるほどに、聞く面々もまた、都踊を見て来た余韻にひたつていたのである。その場の雰囲気も見事に伝わってくる句である。（葉）

筆者もこの程初めて都をどりを鑑賞する機会を得たが、何とも雅な絵巻物であった。その時の感想を述べている人を表現しているのであるが、言葉だけではその感動が伝えられず、ジェスチャーを交えて興奮気味に語っているのだろう。その感動が目の前に迫ってくるようである。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

金子選

夏の月母の亡骸娘の添ひ寝  
淡路島 木下圭子  
玉苗の島に帰りし娘の御霊  
同  
けふよりは百寿の翁花下に笑み  
神戸 後藤比奈夫  
この桜人の心の中へ散る  
同  
神宿るとき餅花の畏まる  
東京 稲畑廣太郎  
餅花の揺れて揺れざる心かな  
同  
廊曲り曲り奥なる余花の庭  
長岡 安原 葉  
子規展を出て薫風の丘に立つ  
同  
君の来れざるが淋しむ花の旅  
相模原 木村享史  
み吉野に君待つ 董咲きたるに  
同  
ミモザ咲き祈の人となりにけり  
神戸 和田華凜  
黄色にも閑のありミモザの黄  
同  
地震のなきことが何より桜餅  
熊本 岩岡 中正  
神の御手よりこぼれたる懸藤  
同  
栗の花力まかせに匂ひ来る  
神戸 三村純也  
釣り上がる鮎の一閃二閃かな  
同  
冷酒や虚子を偲べば昂りぬ  
同 浜崎素粒子  
また会へる確かな予感夏つばめ  
同

その頃のこと思ひ出ず月見草  
東京 今井千鶴子  
冷房のふと効くときの卓の花  
同  
駅うららいつもどどこかが工事中  
龍ヶ崎 今橋真理子  
若楓よりすべりくる風の中  
同  
薔薇園の香を鎮めたる重き風  
東京 山田閨子  
息災と一筆新茶届きけり  
同  
光る雲散らばる雲や空の秋  
同 今井肖子  
つくづくと鴉は黒し水の秋  
同  
彼岸会に詣できし人皆穏やか  
吹田 大橋 暁  
加茂川の飛石伝ひ風光る  
同  
くにうみの島より出でて鱈舟  
東京 大久保白村  
入学の子にむづかしき校歌かな  
同  
不足なきよはひ賜り年惜む  
福山 竹下陶子  
枯薔薇の棘にかゝれる昨夜の雪  
同  
明易となりゆくままの太虚かな  
群馬 中杉隆世  
明易のすべて零よりはじまりし  
同  
御退位も近き皇居や杜若  
東京 高濱朋子  
久闊を叙すはこれから明易し  
同